

発達障がいと不登校にかかわる家庭支援と 関係機関との連携のあり方

常磐大学人間科部

心理学科 教授 秋山邦久

不登校は病名でも診断名でもありません！


- 「先生、おなか痛い！」と言って生徒が保健室にやってきたら、養護教諭はどのように対応するでしょうか
- 「それ腹痛だ」「腹痛ならベッドで休んでいなさい」とはならないでしょう
- できる限りの問診を行い、腹痛の原因や症状の軽重度を判断し、保健室対応で様子を見るか、帰宅させるか、病院へ行かせるか、救急車を呼ぶべきかなど、生徒の状況に応じた対応を考えるはずです

不登校は病名でも診断名でもありません！


- 「学校に行きたいくない」「学校に行けない」
児童生徒には
- 「それ不登校だね」
それなら「不登校ならなら見守りましょう」
となるのでしょうか？

不登校とは？


< 腹痛 >

- お腹が痛い状態
- 病名（疾病）ではない
- 腹痛の原因は様々
盲腸、胃潰瘍、胃炎、腸捻転、
癌、過食、冷やした、風邪・・・
- 原因を明らかにし
= 診断
- 診断に基づいた対応を
 治療・処置

< 不登校 >

- ▶ 登校していない状態
- ▶ 病名（疾病）ではない
- ▶ 不登校の原因は様々
いじめ、学業不振、体罰、障害、
怠学、虐待、貧困・・・
- ▶ 原因を明らかにし
= 見立て
- ▶ 見立てに応じた対応を
 支援

不登校への間違った関わり

- ▶ 病名（疾病）と捉える = 十把一絡げ
- ▶ 原因を考えない  見立てをしない
- ▶ 自分なりの解釈で評論や対応をする
 - 可哀想な子 根性が無い子
 - 悩んでいる子 寂しい子
 - 学校や親が悪い などというラベリングをする
- ▶ 間違った対応で長期化
 - 不登校 ⇨ 引きこもり ⇨ 8050 ⇨ 9060
 - 不登校 ⇨ 貧困 ⇨ 負のループ

- 不登校という状態には

その原因によって

✓様子を見ていればよいものから

✓緊急対応をしなければならないものまで

さまざまであることを、

評論家や観客ではなく、子どもの将来に責任を持つ支援者は、常に押さえておく必要がある

☛ 子どもの自立と家族崩壊防止に責任を

「見守りましょう」は、他人事だから？

1. 先送り支援は意味がない

<心理モデル>

不登校 → ひきこもり → 8050 → 9060

2. 将来を見通し、今を大切にした子育てを
発達は、点ではなく線で見ると
親や家族は、子どもを点で捉えがち

3. 子育ては自立を目標に

* 自立とは

その人の能力に応じて、社会に働きかけ、それにより報酬を得て、その報酬の範囲内で、己の生活を営むこと

「見守りましょう」は・・・

- ▶ 高度経済成長時代の対応
- ▶ 現実適応よりも自己実現
 それでも、みんなが食べていけたから
- ▶ 対人不安型の不登校が中心だった時代と環境
 家族や支援者に守られて
 しっかり引きこもり、余計な刺激を避け、
 孤立を味わい、十分に悩み抜くことで
 自分探しと自己成長がなされた

「見守りましょう」は・・・

- ▶ 高度経済成長期（昭和から平成の初期）は
 - ✓引きこもることで、自然に森田療法的対応に
 - ✓不登校の時期は「さなぎ」の時期
 - ✓じっくり悩み、自分探しの読書と映画
 - ✓映画評論家の方々は 不登校経験者だったりした

▶ 現在の不登校の環境

家族や支援者に守られて
ネットで疑似社会とつながり
しっかり引きこもれず、余計な刺激が多く、
孤立を感じず、ゲームやYouTubeがあるので
悩む暇もなく時間が過ぎ、何年たっても
自分探しと自己成長がなされない

不登校の子を元気づけよう！

- スタディ号 全国ツワー（ゆたぼん）

- 背景には

不登校の子は「虐げられて、可哀そうで、元気がない子だから」という偏見が

当社の寄宿舎にいる不登校・引きこもりの方々

このニュースを見ての感想

俺たち「困ってないし」「元気だし」

「毎日、楽しいし」「余計なお世話って感じ」

「見守りましょう」は・・・

- ▶ 老後破綻の予防

 - ローンなどの借金返済
 - 十分な退職金や預貯金
 - 子どもの自立

- ▶ 時代遅れの間違った対応で長期化

 - 不登校 ⇨ 貧困 ⇨ 負のループ

* オルタナティブ・スクール（高校）出身者

大学中退 = 8割

10人に8人が大学生活についていけない

だから、**大学進学率**のみ発表する

不登校への対応で

- ・「野良カウンセラー」「エセラー」

何年間も同じようにプレイセラピーだけを行っていたり、カウンセリングもどきをしているのは
⇒先送りしてるだけ

寝たきり大黒柱問題

家庭内やくざ問題を作らない対応を

スクールカウンセラー配置3万件も不登校減少つながらず
産経新聞 2021/11/4 21:25

不登校の小中学生と スクールカウンセラーの配置件数の推移



さまざまな理由で学校に通えない小中学生をケアしようと学校を起点に子供や保護者の心理的なサポートを担う「スクールカウンセラー(SC)」の配置が全国の自治体で広がっている。一方で、令和2年度の不登校の児童生徒の数が19万6127人と過去最多となり、SCの増加が不登校の減少に必ずしもつながっていない。財務省も国の事業の改善点を探る調査でSCの資質向上の必要性を指摘するなど、SCの制度自体の改善を求める声も上がる。

東京新聞 2024.3.6

東京都教委が250人大量「雇い止め」 スクールカウンセラーを3月末 契約更新の選考基準も不透明

2024年度も継続して働くことを希望し公募試験を受けた都スクールカウンセラーのうち、2割を超える250人が採用されないことがわかった。

人、それぞれ

- 同じ状況を見ても、解釈は人それぞれ
- 特に行動については、皆が評論家
- 子どもたちの問題を

【一般の人は】

- ①行動面だけを見て
- ②自分の文脈で
- ③自分なりの理由づけをして
- ④的を外れな助言？ 評論をする

⇒ **変化が起きない（改善しない）**

人、それぞれ

- 同じ状況を見ても、解釈は人それぞれ
- 特に行動については、皆が評論家

- 子どもたちの問題を

【専門家？は】

- ①行動面から
- ②自分の理論を当てはめ
- ③御託を並べて
- ④変化のない支援ポイことを繰り返す
⇒ **変化が起きない（改善しない）**

適切な支援とは

- ① 行動の原因を、
生物・心理・社会の3側面から見立てて
- ② 個別具体的な支援計画を作成し
- ③ 専門的技法を用いて介入し
- ④ **変化が起こす（改善させる）**
- ⑤ 変化が起きなければ見立て直す
見立てが変われば、対応も変える

* **なおす**支援 変化が起きる

適切な支援とは

* **なおす**支援 変化が起きる

「なおす」 → 「治す」 × 医師の独占行為

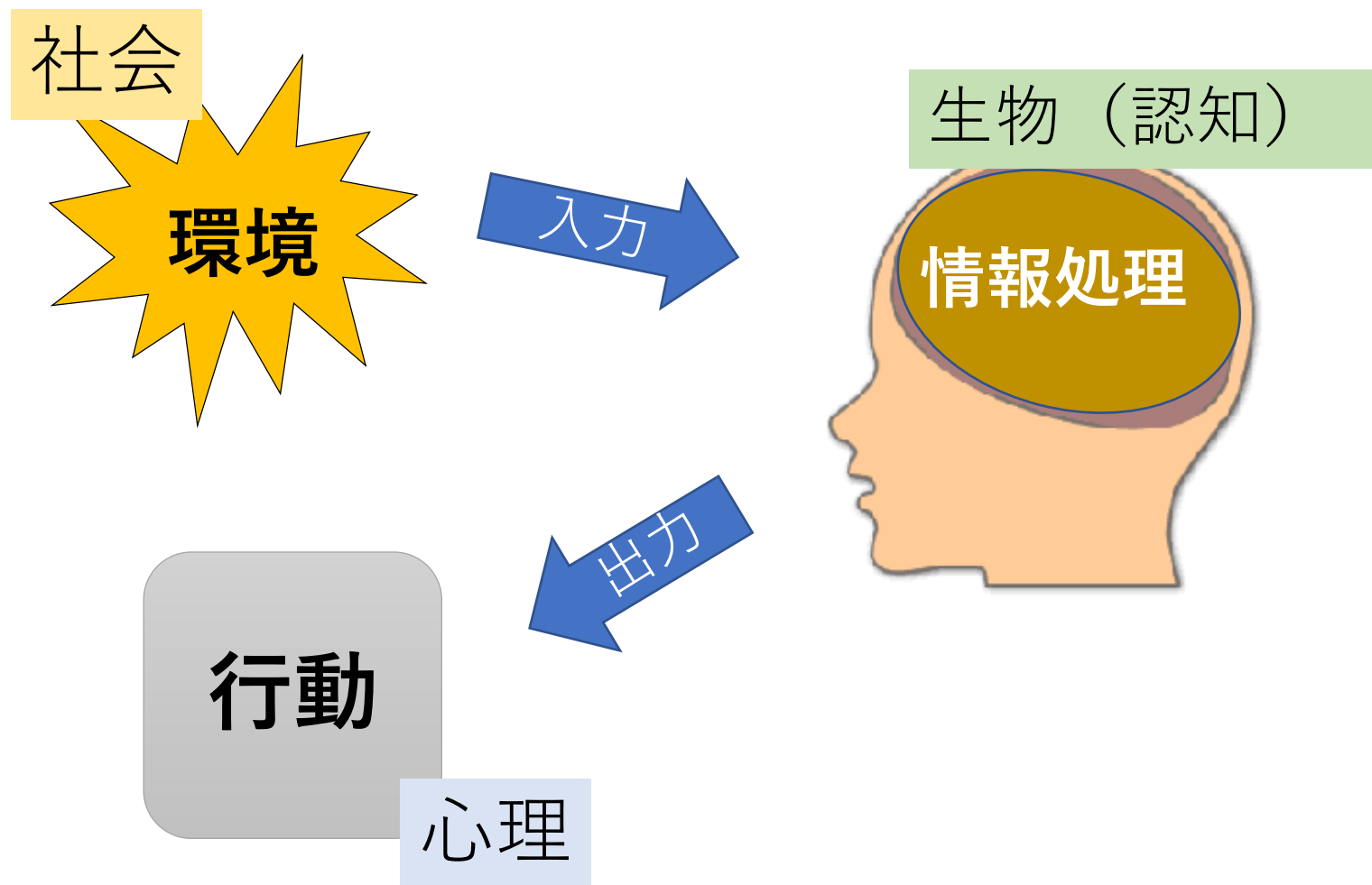
「なおす」 → 「直す」 ○ 教育・心理など

つまり 自立に向けて

「生活行動を立て**直す**」

「行動の改善」 が起きる

適切な見立てに基づいて支援とは



不登校も「生物・心理・社会モデルで」

- ◆生物：身体・器質・精神神経学的な課題
身体的ハンディ、知的レベル、認知の偏り、
精神疾患（うつ、統合失調症、強迫、不安・・・）など
- ◆社会：生育・学習環境や時代背景
虐待、ヤングケアラー、貧困、宗教、友人、
親戚、体罰・いじめ、サポート、令和 など
- ◆心理：性格、気質、不安、対処行動など
几帳面、神経質、こだわり、頑固、不安、
行動レパートリー不足、 など

支援を必要とする子どもと家庭

* 全ての子どもと、ご家庭

- 生物的側面（子と保護者ともに）

発達特性、知的課題、身体的課題、精神的課題 など

- 社会的側面

価値観・判断基準の変化、文化の違い、家族関係、
経済的課題、虐待 など

- 心理的（行動）側面

社会行動の未学習・誤学習、対処行動の少なさ など

• 環境（社会的側面）

- 家族関係：児童虐待、貧困、夫婦不仲、溺愛、保護者の精神障害、ヤングケアラー
- 友人関係：いじめ、仲違い（誤解）、悪口
- 施設関係：対指導者、対クラス、**制度・組織**

*いじめ、体罰の有無に注意すること

- 生物的側面

- 発達特性型不登校

- • • ASD、ADHD、LDなど

- 知的課題型不登校

- • • 知的障害、境界級知能、優秀児

- 身体的課題型不登校

- • • • 身体疾患、身体表現性

- 精神的課題型不登校

- • • • 不安、精神障害、強迫など

- 気質

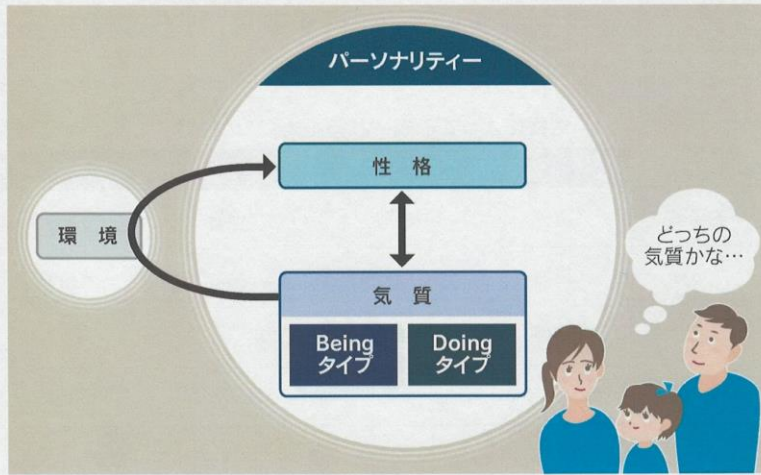
- • • • Being Doing

「子どもと性格合わない」「理解できない」 背景に気質の違い

2024/7/16 5:00 | 日本経済新聞 電子版

「子どもと性格が合わない」「子どもの行動が理解できない」。こんな悩みを抱える親は少なくないだろう。子どもと相性が悪いと感じる背景には何があり、どう対処すればよいのか。子どもの心理に詳しい常磐大教授の秋山邦久さんの助言を紹介する。

性格を形作る気質には2つのタイプ



人にはそれぞれ生まれもった「気質」というものがあるとされる。気質を土台として、生育環境に影響を受けながら性格が形成され、パーソナリティー（人格）が出来上がる。

親子やきょうだいでも気質の違いはある。互いに異なるタイプの気質をもっているために、そりが合わなかったり、なかなか行動が理解できなかったりすることがある。

気質は先天的で大きく変わるものではないから、まず子どもがどんな気質をもっているのかを把握し、それに合わせた関わり方をすることが大切だ。

気質には「Being」「Doing」の2タイプ

気質には様々な分類方法があるが、大きく2つに分けることができると考えている。ピーイング（Being）タイプと、ドゥーイング（Doing）タイプだ。

ピーイングは危険を回避できる場所で、自分の好きなことに集中するようなタイプ。ドゥーイングは何か行動を起こし、新しいことを見つけることが好きなタイプだ。

日常生活で子どもをよく観察すると、どちらのタイプなのかが分かってくる。

気質は子どもが集団のなかで、他人と関わる場面でよりはっきりと現れる。公園に遊びに行ったとき、ピーイングの子どもは一人で遊んで満足し、ドゥーイングの場合は他の子どもと積極的に遊ぼうとする傾向がある。親も公園にいる人と自分がどう関わるかで、自身の気質を知ることができるだろう。

臨床心理学の研究では、ピーイングとドゥーイングでそれぞれ2種類の性格があることも指摘されている。判断基準や注意力、行動などでそれぞれ特徴があり、子どもを理解する参考になる。

気質によって形成される4タイプの性格

	Beingタイプ		Doingタイプ	
判断基準	自分	規則	他者	感情
行動	単独	こだわり	集う	演技的
注意力	集中	偏り	転導(注意の対象が 移り変わりやすい)	散漫
対人関係	自分と対話	他人への関心 低い	寂しがり屋	不安定

それぞれの性格に
合わせた関わり方が大事

関わり方	論理的に	規則化や ゲーム化が有効	受容と共感を 大切に	距離を取り、 観客に徹する
------	------	-----------------	---------------	------------------

(注)秋山さんの話に基づく。東京大助教として臨床心理などを研究した森俊夫氏の理論を参考に作成

例えば判断基準でいうと、ピーイングは「自分」か「規則」かで性格が分かれ、ドゥーイングは「他者」か「感情」かで分かれる。

映画や小説の登場人物の性格を分析してみると、この4つのタイプに分かれ、物語の面白さにつながっていることが多々ある。作家は人間観察が得意で、無意識のうちに多様なタイプを登場させているのだろう。

強調しておきたいのは、気質や性格の分類は、子どもにレッテルを貼るのが目的ではないということだ。子どもを見る目を肥やすための一つの物差しで、どちらのタイプが良いとか悪いとかいうものでもない。

気質を理解し、特性を踏まえた関わり方をすると、子どもとの意思疎通がスムーズになる。少しの工夫で、行動も変えやすくなる。

子の気質に合わせた関わり方を

気質がビーイングで、自分の中に判断基準があり、単独で行動する傾向がある場合、論理的な話し方をすると受け入れられやすい。反対にドゥーイングで他者の中に判断基準がある場合、受容や共感を大切にするとよい。

ドゥーイングの子どもが食事中に動き回るのは困るだろうが、合間に食事や飲み物を運ぶといった動く機会をつくると、逆に落ち着いて食べるようになる。叱るよりも効果的だ。

ビーイングの子どもが一つのことでずっと遊んでいる場合は、まずは一緒に遊んだり見守ったりしてみる。「この世界も楽しいね」と遊びの共有ができたところに、別の遊びを提案すると、子どもが素直についてくる。こうして無理なく子どもの世界を広げることができる。

気質に合わない行動を強いたり、親の気質に合わせるように求めたりすれば、子どもの負担となり、過度な場合は虐待行為につながりうる。

日本の学校は子どもにドゥーイングの行動を求めがちで、ビーイングの子どもにとっては過ごしづらい環境だとも感じる。一人ひとりの気質に応じた対応を広げるべきだ。

子どもにとっても、自分の気質を理解して受け入れ、それに合った職業や生き方を選んでいくことは大切だ。

親子が互いに違う気質をもっているからこそ、いい関係性が築けることもあるだろう。

分かりやすい例はお笑いコンビだ。サービス精神にあふれて常に人を笑わせようとするドゥーイングの人と、こだわりが強く自分にとっての面白さを追求するビーイングの人が組み、うまくいっている例が何組もある。

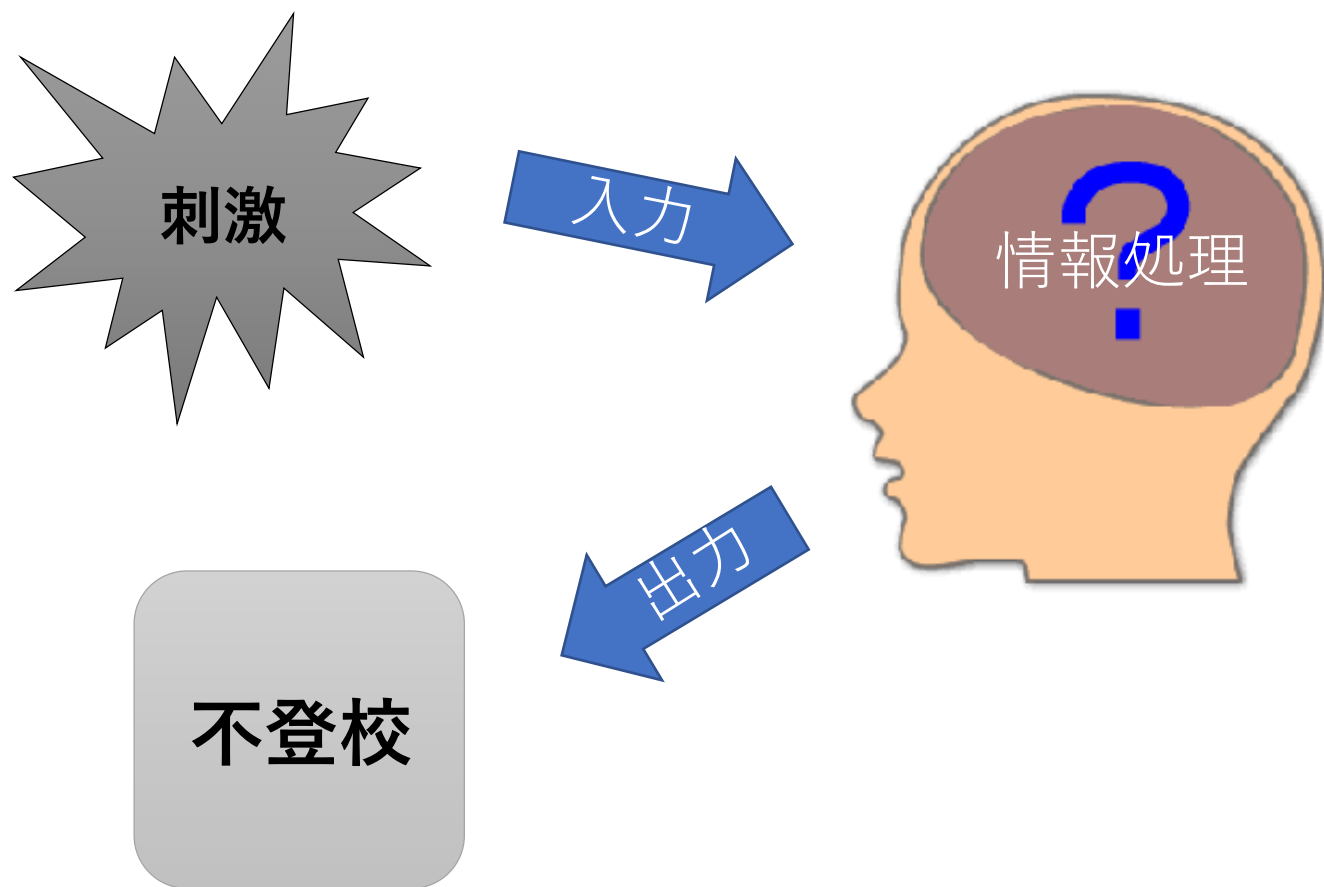
自然と子どもの気質をつかみ、合わせられる親がいる一方で、苦労している親も多い。子どもをコントロールしようとして思い悩むのではなく、自分の幅を広げる貴重な機会だととらえて、子どもと向き合ってほしい。



秋山邦久さん

あきやま・くにひさ 専門は家族心理学や児童福祉臨床。大学で公認心理師・臨床心理士の養成に携わるほか、全国の児童相談所や病院などで心理支援やカウンセリングを行っている。

適切な見立てに基づいた支援とは

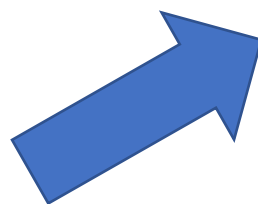


間違った支援とは

心の問題だ！

不安なんだろう
辛いだろう
かわいそうな子
弱い子
わがままだ

登校
できない
しない



厳しくすれば良いんだ

見守りましょう
信じてあげて
寄り添いましょう
なんでもプレイセラピー

適切な見立てに基づいた支援とは 不登校の場合

- ① なぜ、今、中学1年の〇〇さんが
- ② 学校に行けない（行かない）状態にいるのか
- ③ 心の問題や誰かのせいにするのではなく
- ④ 生物、心理、社会モデルの観点から
- ⑤ 自立に向けた**支援ポイントを探し出し**
- ⑥ 〇〇さんの自立に向けた
- ⑦ 未来構成と行動の変化を楽しむ

不登校への対応

- 不登校だから、プレイセラピーを
- 不登校だから、見守りましょう
- 不登校だから、登校刺激はやめましょう
- 不登校だから、無理やり連れて行きましょう
- 不登校だから、かわいそう！元気づけてあげよう



ではなく



Aさんには、見立てに基づき訓練を

Bくんには、見立ての基づき環境調整を

Cくんには、見立てに基づき医師の相談を（服薬）

Dさんには、見立てに基づきプレイセラピーを

不登校の介入判断

不登校の原因の大枠

- 社会性未熟型（甘やかし、放任）
- 学業不振型（知的課題群も）
- 発達障害型
- 精神障害型（ゲーム・スマホ依存も）
- 環境型（いじめ、体罰、児童虐待）
- 対人不安型
- 怠学型（非行、無気力）
- 積極型 → 革命小学生だった「ゆたぼん」

✓積極型不登校

- ・ ゆたぼん（少年革命家ユーチューバー）
- ・ 支援は要らない
- ・ 他の不登校と一緒にしないこと

✓学校内不登校（受動型）

- ・ 指示が無ければ動かない
 - ・ ただし、言われたことにな素直に従う
 - ・ また、登校もしているため問題視されない
- 社会に出てから問題が表出（課題の先送り）

依存症にしない支援を

発達障がいのある子は 依存症になりやすい
ハイリスク要因である

依存とは

1. コントロール喪失

2. 依存の種類と分類

① 物質依存

薬物、アルコール、タバコ、大麻 など

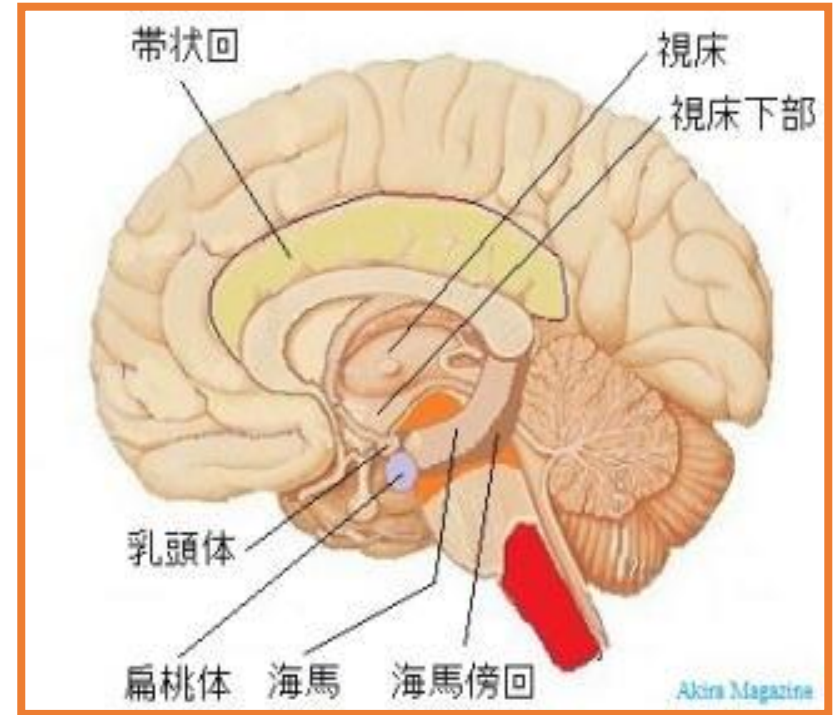
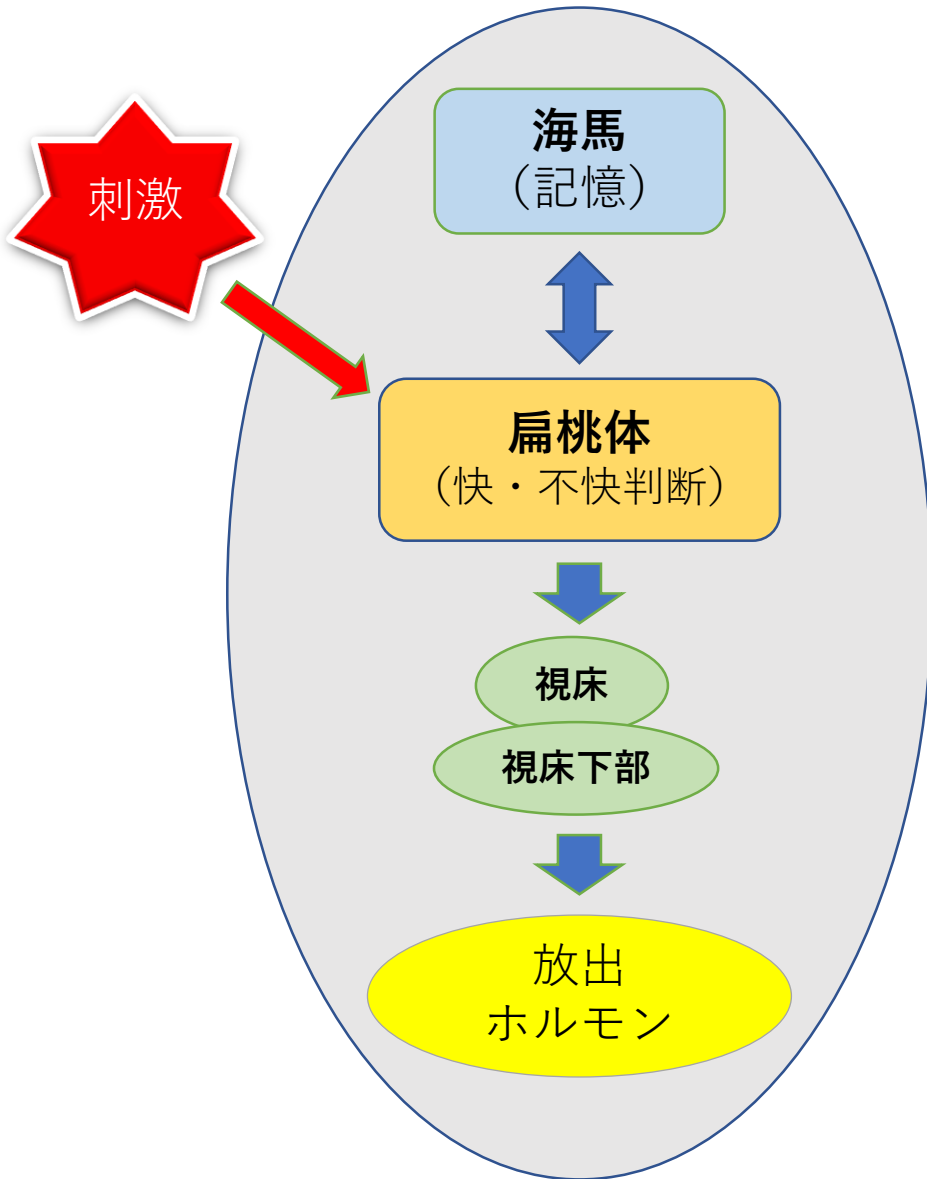
② 行為（プロセス）依存

ギャンブル、買い物、盗癖盗撮、ネット・ゲーム、
性、浮気、自傷、浪費、過食 など

③ 関係依存

異性依存、DV、ストーカー、共依存 など

依存の脳科学



放出ホルモン

◆幸せホルモン

= 条件付けを強める（強化子・好子）

- ✓ オキシトシン（愛情ホルモン）
- ✓ ドーパミン
- ✓ セロトニン
- ✓ エンドルフィン

◆不快ホルモン

- ✓ 副腎皮質ホルモン（コルチゾール）

【依存症の脳の仕組み】

- ドーパミン（神経伝達物質）＝快樂物質
 - 脳内に分泌されることで快樂や喜びを感じる
 - 好きなこと ⇨ ドーパミンは分泌され行動が習慣化
 - 習慣化でドーパミン分泌頻度も増え、快樂や喜びを感じやすくなる
 - 神経伝達物質は有限でありすぐに枯渇する
- それまでの強烈な快樂を得ようと、その行動にのめり込む
- すぐドーパミンは枯渇し、むしろ焦りや不安、退屈感といった不快体験が増え、これを解消するために行為を繰り返すドーパミンを・・・という悪循環に陥る
- このレベルにまで達すると脳は快樂だけを求めて体に指示を出すため、簡単には抗えなくなる
- このような経過を経て、「やってはいけないとわかっているんだけどやめられない」という依存が形成される

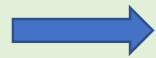
オペラント条件づけ

正の強化：強化子を得ることで行動の頻度が増える

三項随伴性

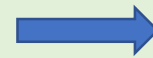
先行刺激

弁別刺激



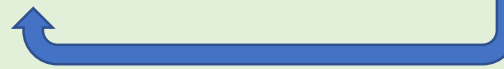
行動

オペラント行動



結果

強化子・好子
(ご褒美)



行動の出現頻度が増える：正の強化

暇

弁別刺激



ゲーム

オペラント行動



脳内麻薬

強化子・好子
(ご褒美)

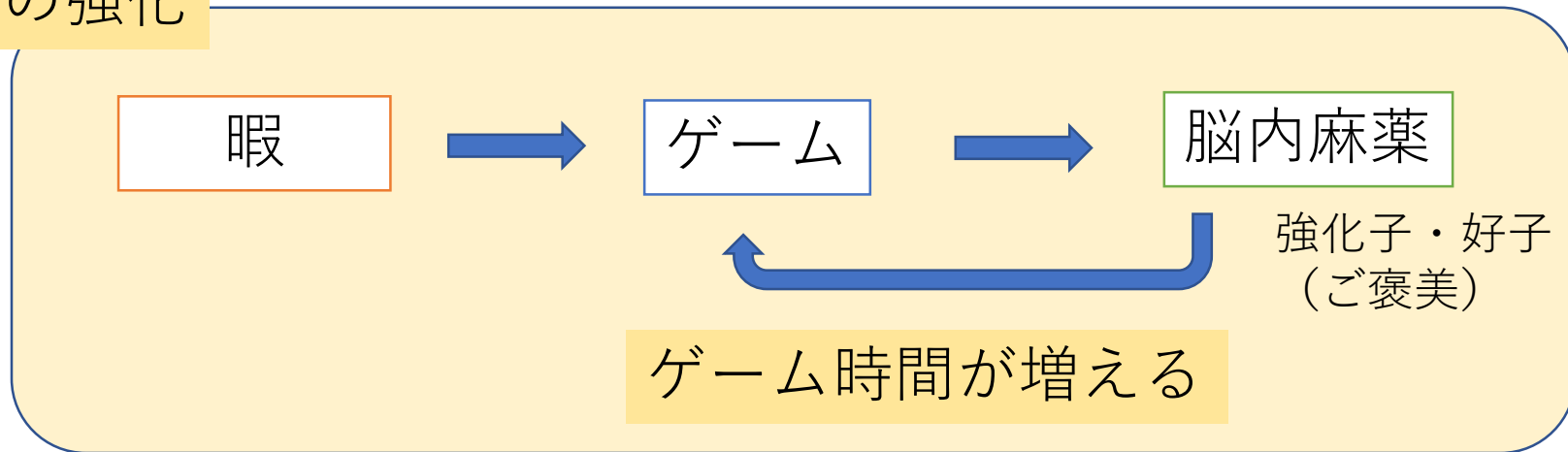


ゲーム時間が増える

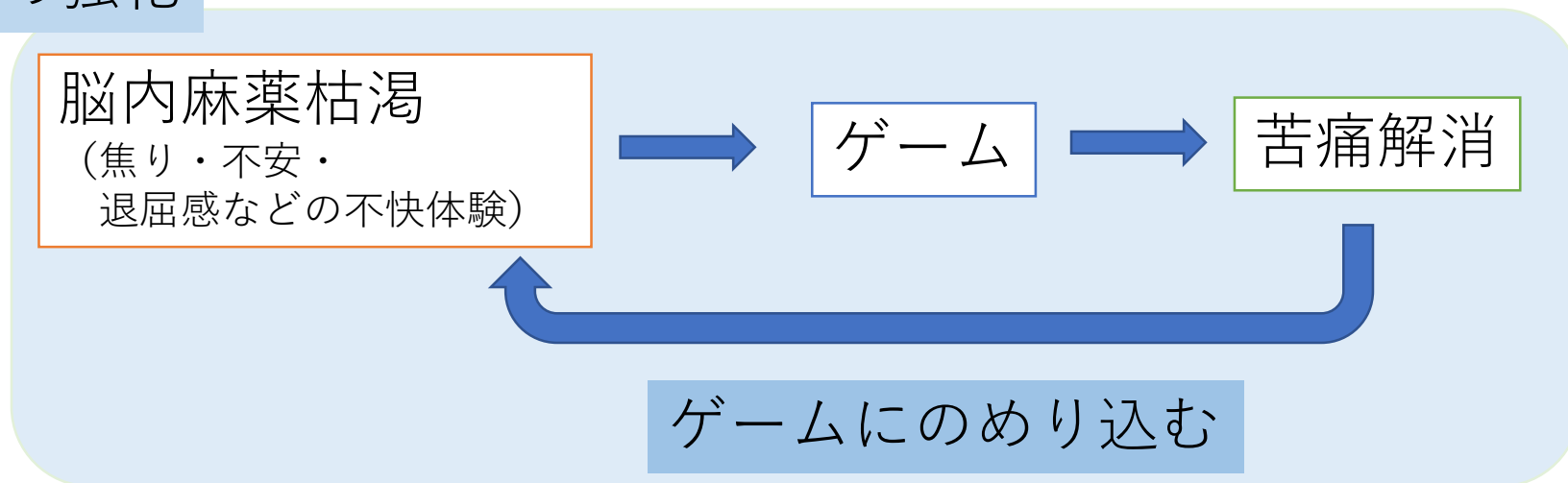
依存は

正の強化と負の強化のダブルパンチによる 強力な条件づけ

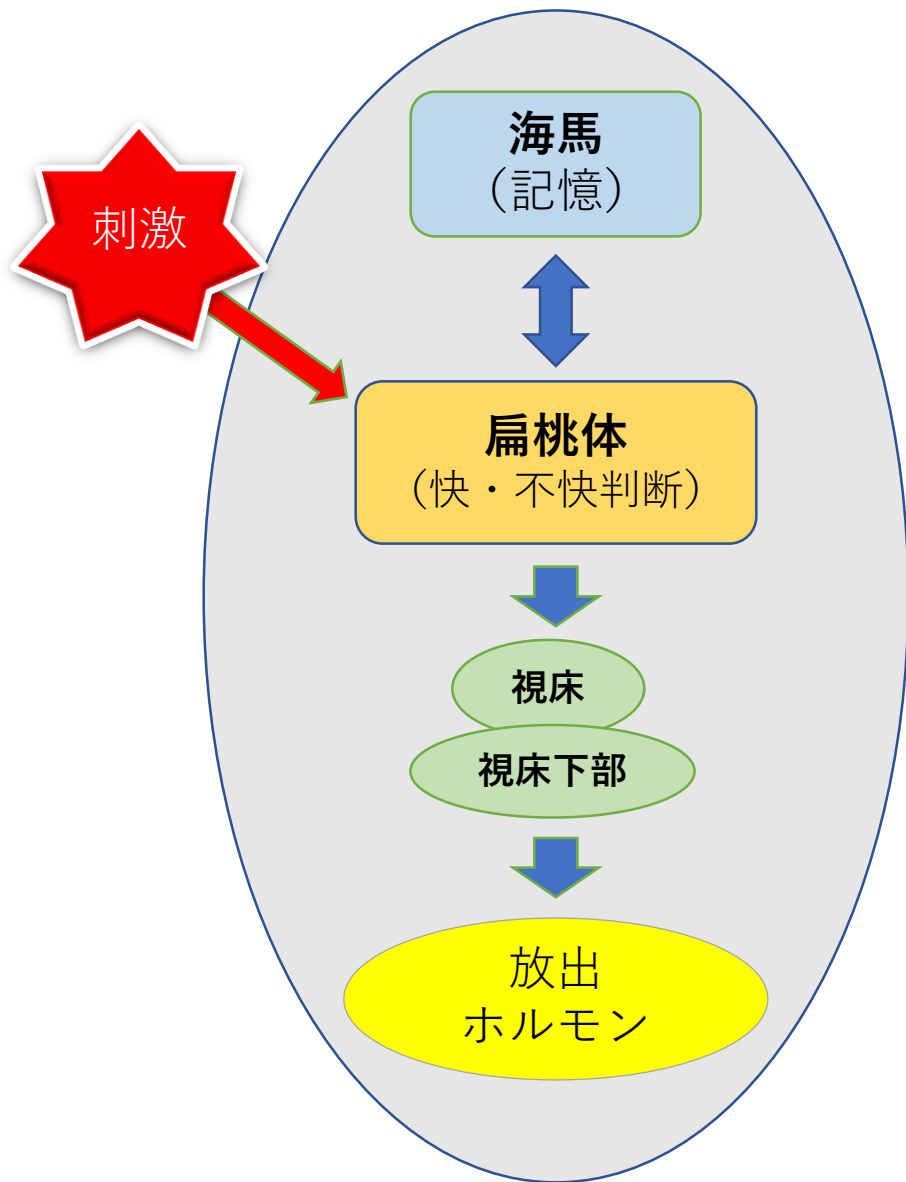
正の強化



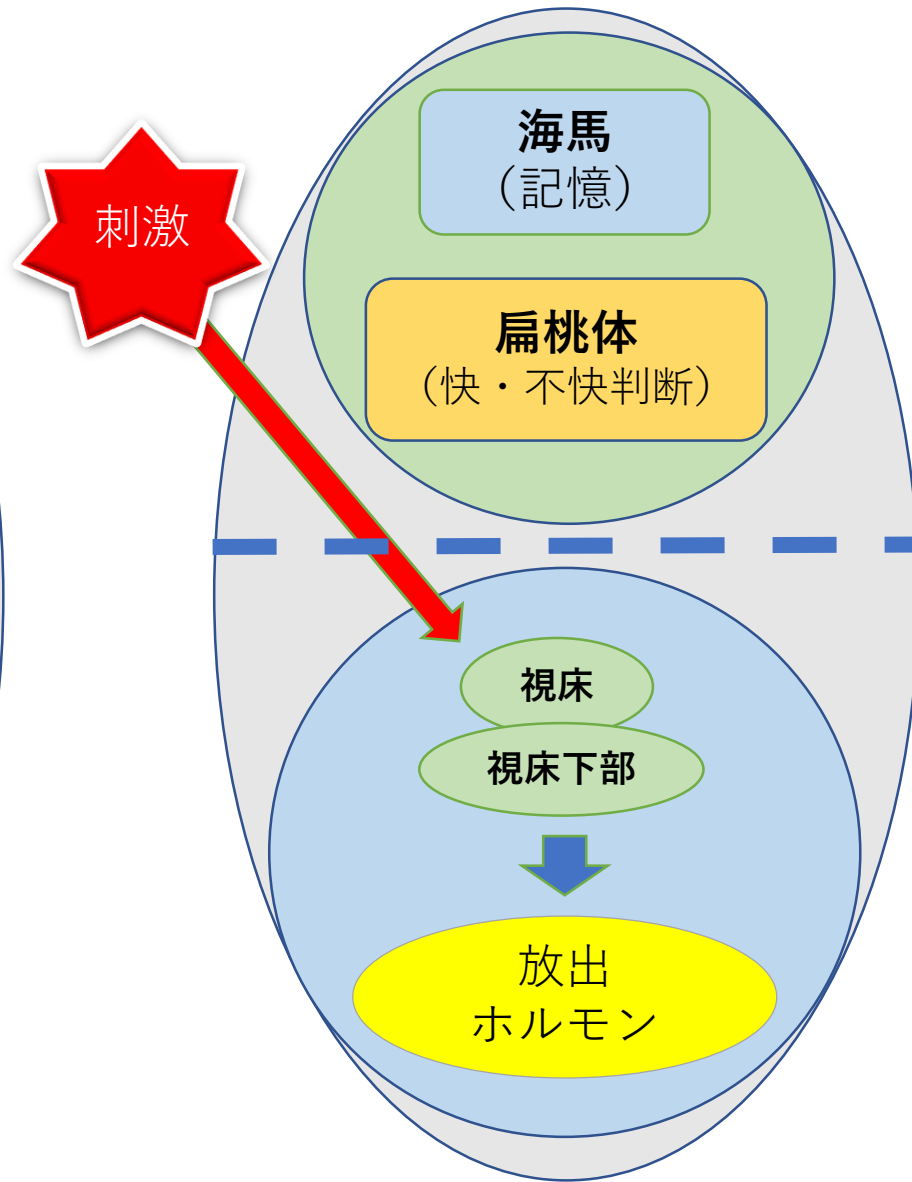
負の強化



通常の脳

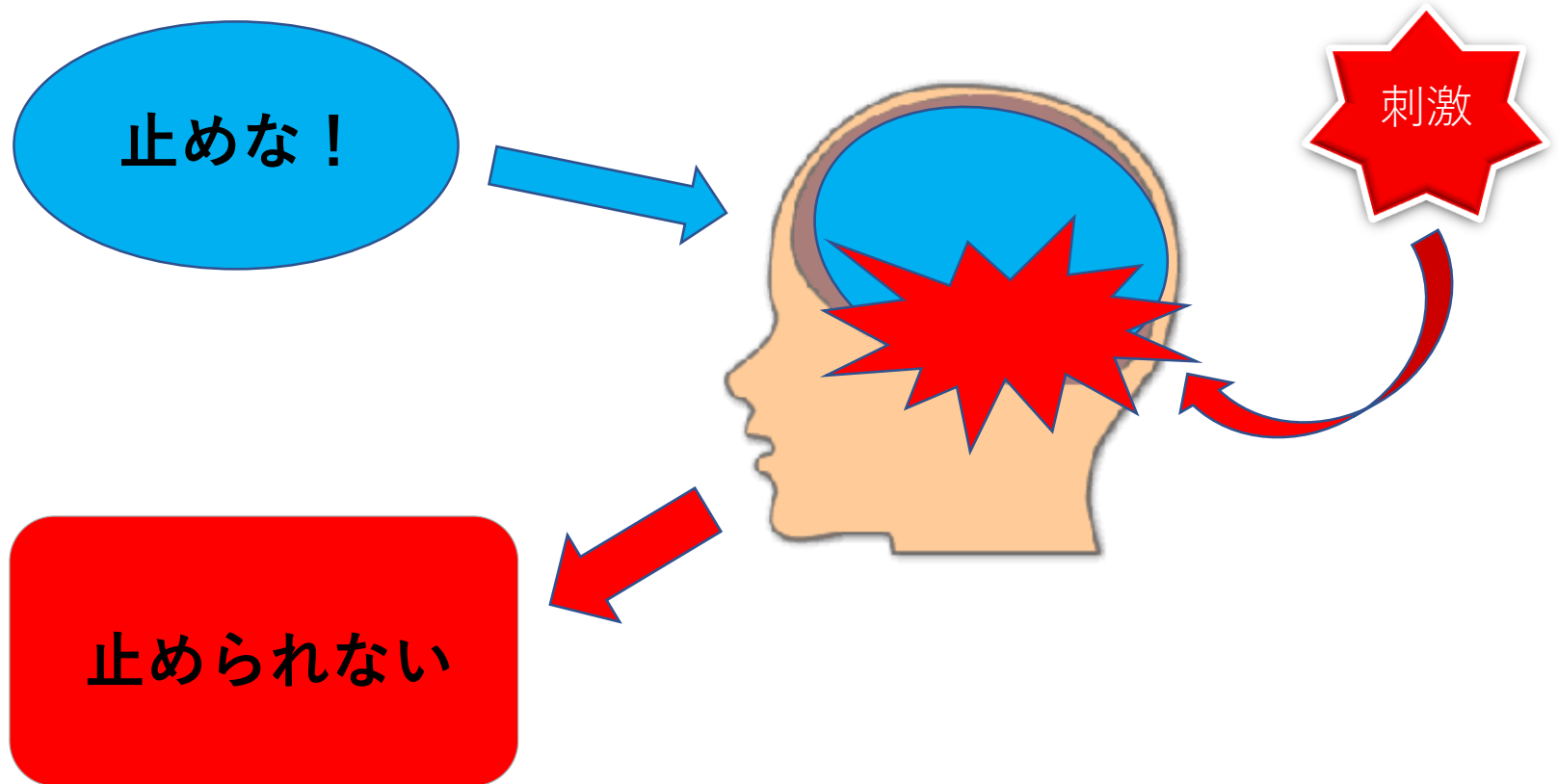


依存脳（分離脳）



依存は生物学的側面が強いため

⇒ 分かっちゃいるが、やめられない！



アディクション（依存）のサブタイプ：パスウェイモデル

① 行動的条件付け：報酬と強化の経路

合併症が無く、楽しんでいるうちにやめられなくなったタイプ

② 情緒的脆弱：逃避・回避の経路

うつや不安、自己治療的な使用が目的で、コーピングや問題解決能力が乏しいタイプ

③ 反社会的で衝動的：衝動制御の喪失の経路

衝動性が高く注意欠陥や反社会的傾向があるタイプ

* この特性は、さまざまなアディクションでも広く認められ、臨床場面でこのモデルを意識すると患者理解が深まり治療に活かせる ⇒ 見立てが大切

依存脳は なかなか元に戻らない

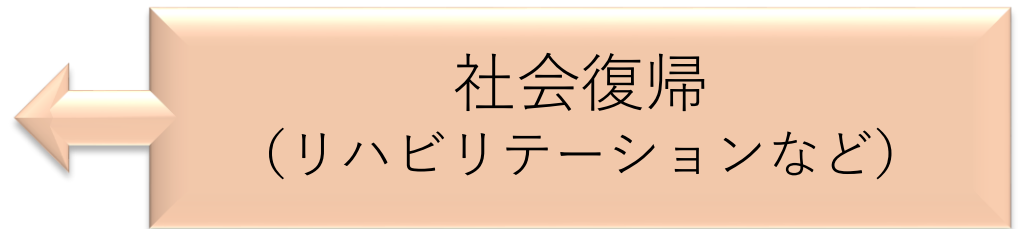
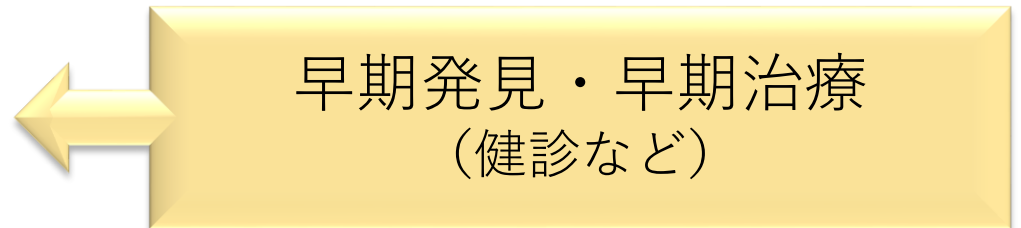
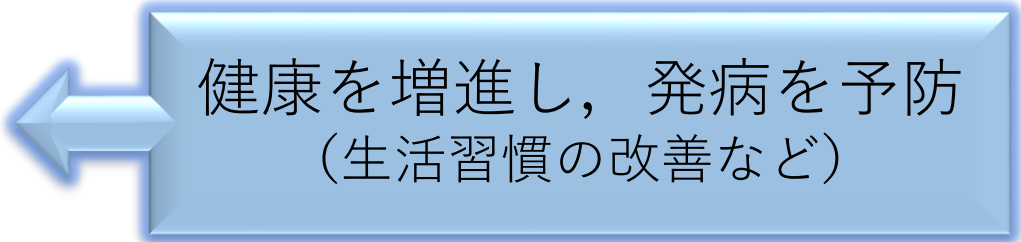
- 報酬系が強化されて条件反射的な依存が起きると脳に致命的な変化が起きる
- 依存対象から離れても、簡単には元に戻らない
- 依存脳を正常脳に戻すことは大仕事

⇒ 依存予防は 一次予防が最も重要で効果的

生活の乱れの修正

= ライフ・スタイル（生活習慣）の立て直し

予防の3次元モデル



不適切な対応

- ✓ 家族の愛が患者を救う！
- ✓ 寄り添い、受け入れ、手を差し伸べて
- ✓ 見守りましょう！

↓ **偽解決**が悪化させる

- こうした助言が家族や恋人をイネーブラー化し
- イネーブリングによって
助かる患者も救えなくなる

注) イネーブラー = 尻拭いする人

あなたは イネーブラー化していませんか？

- 仕事や学校を無断で休みそうなとき本人の代わりに連絡する
- 本人の不始末の処理を代わり行い、謝罪をもする
- 謝金の肩代わりし支払う
- 外で悪さをしないように家の中での依存行動を許している

= これらはすべて**イネーブリング**です！

あなたは イネーブラー化していませんか？

- ・私になんとかしなければ
- ・本当はとても優しく良い人だけど、
寂しい人なんだと私だけは分かっている
- ・私が見捨ててしまったらこの人がダメになるし、
最悪、死んでしまうかもしれない
- ・尻拭いはこれが最後だ
- ・いつかは気づいてくれると信じている

⇒ こうした思いに縛られている

不登校への対応

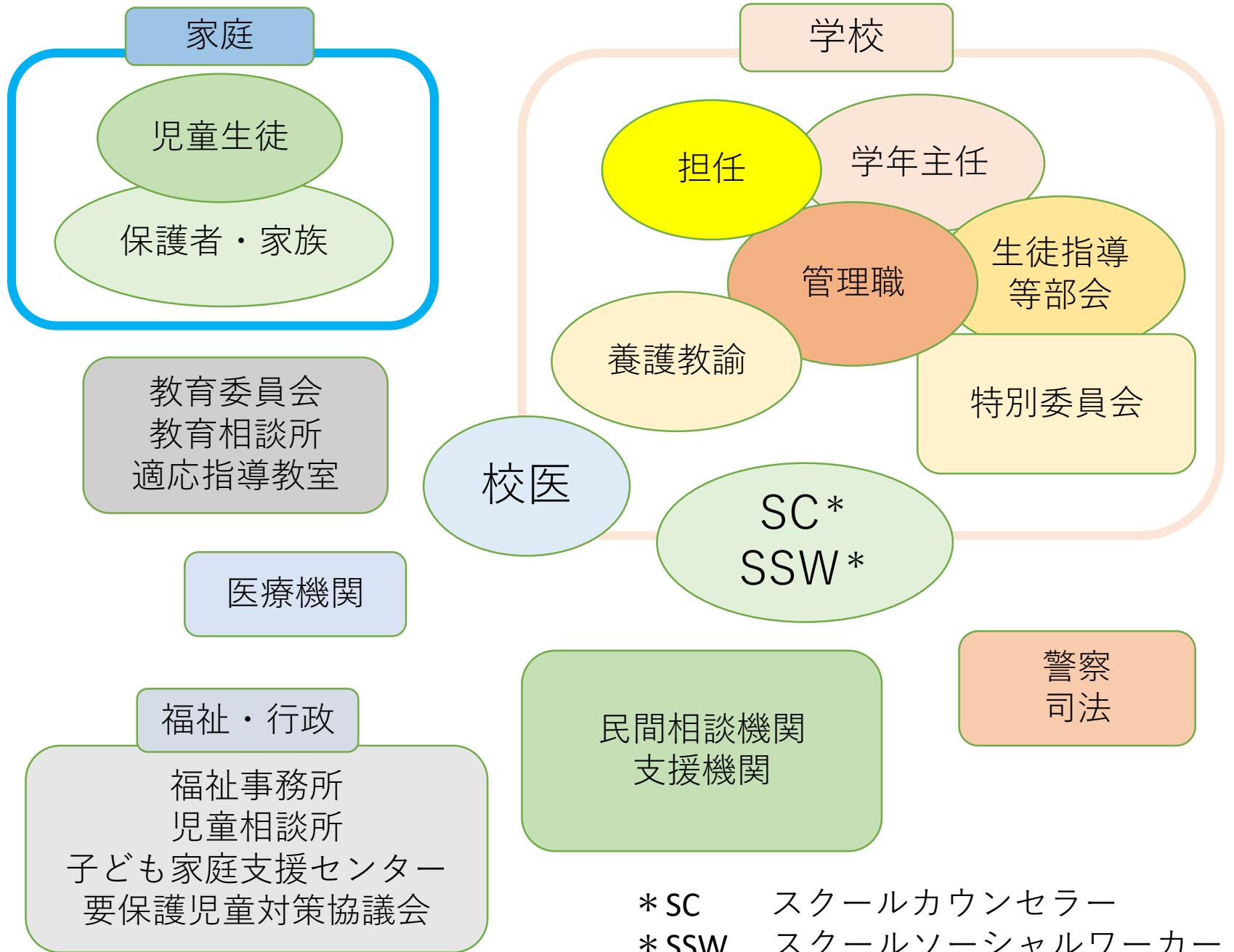
児童生徒それぞれの見立てに基づき

個別具体的な処方箋（行動処方箋）

- ✓ カウンセラーや相談・医療機関が作成
- ✓ 教員、学校、家族はそれを遂行
- ✓ 処方箋作成者にフィードバック
- ✓ その変化に応じて、
 - 処方箋を**書き換える**（3ヶ月ごと）
 - 変化がなければ、その処方が間違っているから
 - 変化があれば、最初の処方とは変わるはずだから

多職種、他機関との連携が必要

- 不登校はその原因によって
学校、保護者、教育委員会（教育相談所・適応指導教室）、校医、病院、福祉、スクール・カウンセラー、スクール・ソーシャルワーカー、校医や、ときには警察や司法 など
- 様々な機関や専門職との連携が求められる
- * スクールカウンセラーは、総合診察医であれ！
- 見立てに基づいた、紹介状（情報提供書）を



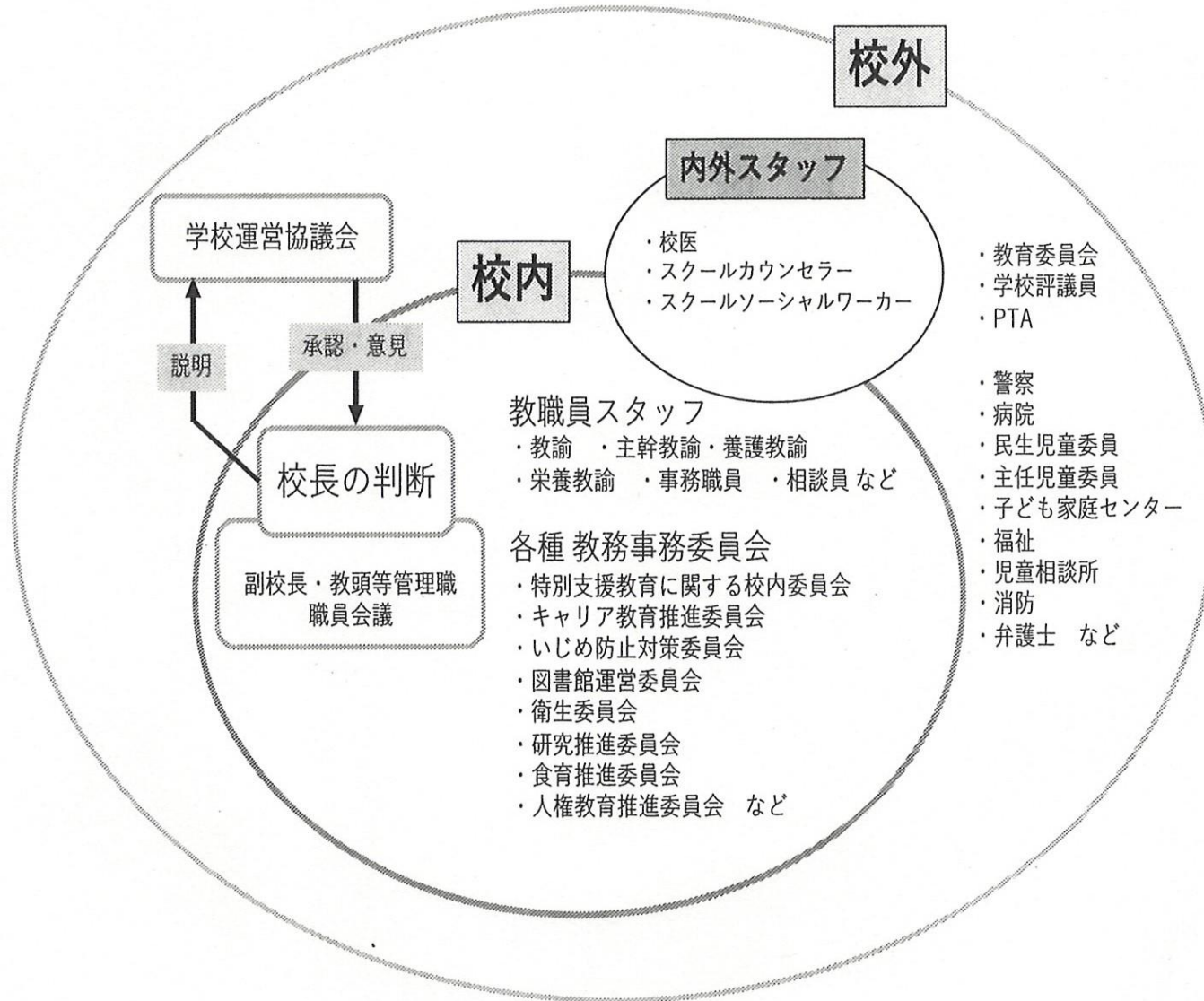


図1 校長の判断を支える学校内外の組織・資源 * 著者作成

ケース検討会を「**作戦会議**」に **情報連携から、行動連携へ**

➤ 検討会（情報連携）

何度集まっても情報共有ばかりで、

対応も「見守り」だけで、ケースが動かない

☞ 「見守りましょう」は臨床的ネグレクトだ！

➤ 作戦会議（行動連携）

各機関（専門職）は具体的な行動を出し合い

それを組合せてケースを動かす

支援者－被支援者関係

➤ ビジター関係

相談意欲無し、拒否・反抗・攻撃的

➤ コンプレナント関係

悩みや不満が多い、相談意欲有り、
当事者意識なし、自ら動かず変化を嫌う

➤ カスタマー関係

上客、当事者意識高く、変化を求め、
自ら解決に向けた行動が可能

いかにカスタマー関係化するか

- ニーズのすり合わせ
 - ✓ 被支援者のニーズは？
 - ✓ 隠れた主訴を把握する
- 困り感のズレの調整
 - ✓ 支援者の目標を押し付けていないか？
- 上手に困っていただく
 - ✓ 三項構造化
 - ✓ 「遠くの神様」と「近くの他人」
- 柔軟な対応・・・個別具体的な支援

行動連携の役割分担（三項構造化）

➤ 憎まれ役と受け止め役を分ける

憎まれ役は「近くの神様より遠くの神様が」

受け止め役は「遠くの親戚より近くの他人が」

学校 ——— 親

行動連携の役割分担（三項構造化）

➤ 憎まれ役と受け止め役を分ける

憎まれ役は「近くの神様より遠くの神様が」

受け止め役は「遠くの親戚より近くの他人が」

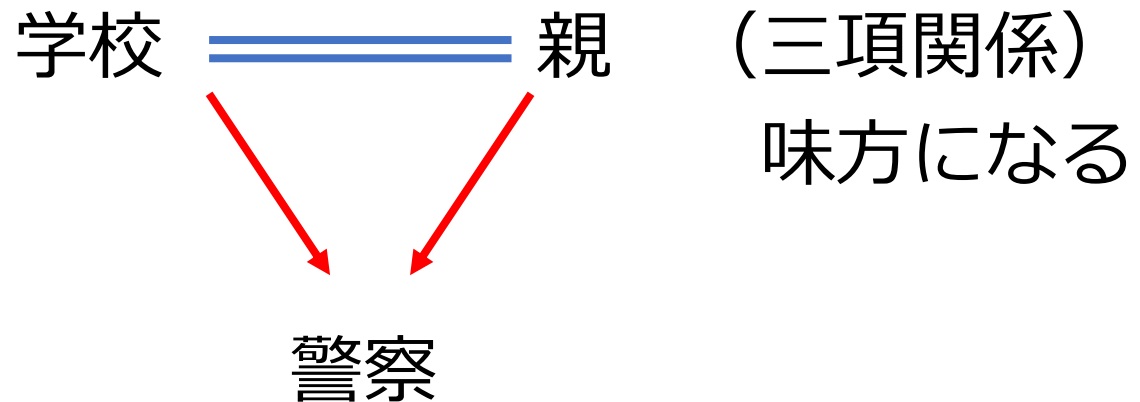
学校 ————— 親 (二項関係)
対立しやすい

行動連携の役割分担（三項構造化）

➤ 憎まれ役と受け止め役を分ける

憎まれ役は「近くの神様より遠くの神様が」

受け止め役は「遠くの親戚より近くの他人が」

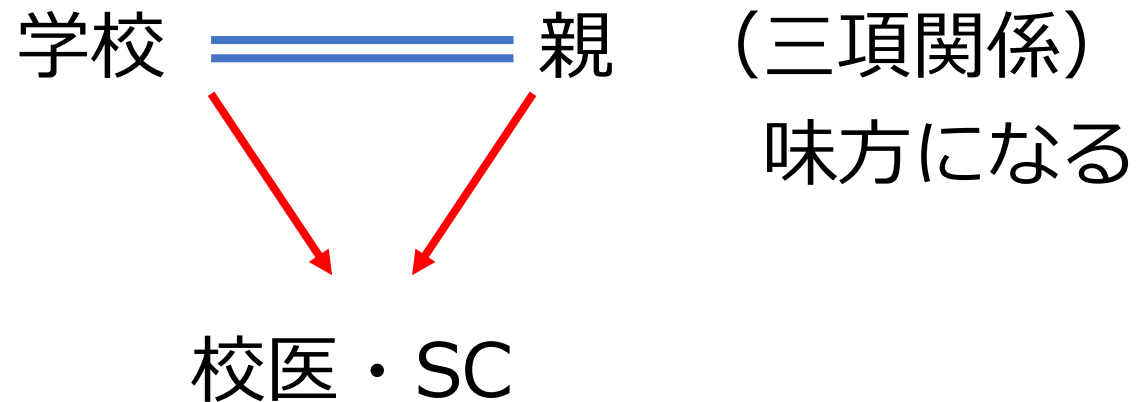


行動連携の役割分担（三項構造化）

➤ 憎まれ役と受け止め役を分ける

憎まれ役は「学校の内外スタッフが」

受け止め役は「遠くの親戚より近くの他人が」

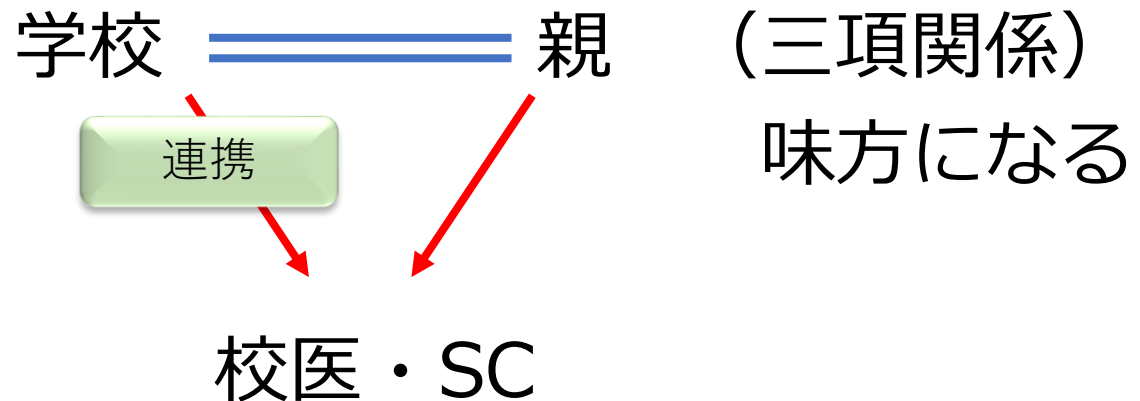


行動連携の役割分担（三項構造化）

➤ 憎まれ役と受け止め役を分ける

憎まれ役は「近くの神様より遠くの神様が」

受け止め役は「遠くの親戚より近くの他人が」



支援の鉄則

遠くの神様と近くの他人

- ▶ 対決や枠作りは、近くの神様より、遠くの神様が
 - 近くの神様・・・教員などの直接支援職員
 - 遠くの神様・・・行政機関（児相、警察、裁判所）
内外スタッフ
- ▶ 日々の支援は、遠くの親戚より、近くの他人が
 - 遠くの親戚を探すより
 - 近くの他人・・・教員、学校、福祉職員など

作戦会議（行動連携）

- ① 「見守りましょう」を禁句にする
「見守りましょう」は行政的・臨床的ネグレクト
- ② このケースの責任機関（専門職）を決める
☞ 「ケース情報は、児相に集約する」など
- ③ 各機関等が行う具体的支援を明確化する
☞ 「次回までに、学校は〇〇をします」
「警察は、〇〇を行います」
- ④ 責任機関等が指示を出し、各機関が従うことを確約

行動連携の役割分担

「学校は見守ってください」と言われたら

「承知しました。では、見守りの**期間と時間**をお示しいただき、実際に**何をどのように**に観察して、その結果を、**どの頻度**で、**どこに報告・連絡**すればよいか、**具体的に**教えてください」

👉 **ポイント**：対象、期間、時間、頻度、強度を示す

機関間連携と機関内連携

- ・ 機関間（他機関）連携

個人の顔が分かり、

名前で呼び合える関係で始める

- ・ 機関内（組織内）連携

個人ではなく、職や立場で話し合う

* 作戦が動き始めたら、機関間も機関内連携となるので、

職や立場で話し合う

- スクールカウンセラーは

- ✓心の総合診察医レベルでなければ務まらない
- ✓さらにケースワークができること